



お金の価値

愛知県・名古屋市立東星中学校 3年 中田 智也

開けた袋の中身を見て思わずはにかんだ。中に入っていたのはペン立て。人の形をしていて、おなかにささるタイプのユニークなものだ。

友達から誕生日プレゼントをもらった。去年、その友達の誕生日会を催したことがあり、その時のお返しだそう。どのようにして自分の誕生日を知ったのだろうか。サプライズで渡してくれたプレゼントはとても嬉しかった。

もらったものというのはやはり愛着が湧く。早速、家や塾で使い始めた。何気なく見る度にその友達のことを思い出せる。塾ではその友達が、「使ってくれているんだー」

と嬉しそうに言ってくれる。プレゼント、お金をかけてという表現はあまり好きではないが、ある意味でお金が、思いを形に変えて僕の元へ届いたのだ。

この時、お金よりもっと大切なものに気付かされることを、僕はまだ知らなかった。

学校でこんな話を聞いたこともある。

「女子はね、大変なんだよ。」

幼馴染なじみの女子と話をしていた時のことだ。プレゼントを渡さないと仲間から外される、とか、もらった物より高い物を返さないと、という思いがあるようで、人付き合いに困ると彼女は言っていた。大きな紙袋にブランド物のマフラーの入ったプレゼントをもらっていた彼女は、くれた人の前では嬉しそうにしていたが、閉口した様子で僕に打ち明けてくれた。男子に比べ女子の方が、誕生日にプレゼントを渡す光景がよく見られる。ただ友達でいたいという思いが交錯して泥沼にはまっていくトモダチ費が、総額いくらになるのか想像もつかない。

そして僕は小さいけど大きな、このペン立てを大事にしようと思った。がしかし、事件はすぐに起きた。

誕生日から2週間ほどたったある日、自習室で鞆かばんを開いた時のことだった。





いつもあるはずの位置にペン立てがないことに気付いた。家に忘れてきてしまったのか、と最初はあまり気に留めなかったが、家に着いて^{あぜん}ととした。

「母さん、ペン立て知らない？」

机の周りや下を探しても、ペン立ては無かった。どこかで落としたのだろうか。血眼になって探しても、とうとう見つかることはなかった。

とても後悔した。物の管理がしっかりできない自分を憎んだ。そして、その友達にとても申し訳ないことをしたと後から気付いた。塾で合わせる顔がない。悩んだ末に僕は、文房具屋へと急いだ。

今、僕がとっている行動は正しいのだろうか。その友達のためにその友達を裏切る行為。訳の分からない葛藤と戦っていた。

「あー、そういうペン立てでしたら、こちらになります。」

もらった物は茶色いプレゼント用の包装がされていて、どこで購入したものかわからなかった。だけどそんな遠くの店ではないだろうと思い、近くの文房具屋や雑貨店を回っていたら3軒目で明らかにいい反応を得ることができた。

そして、とうとう面会することができた。しかしそれは、白く輝いていた。

「あの、黒色は、売ってないんですか。」

「今ここにあるのが、全てです、ね。」

店員に軽く礼を言って、もう一度そのペン立てを見つめる。想像していたよりも値段がやや高かったことに驚いたが、色が違うから買うこともできない。時計が塾始業の時刻を告げようとしていた。心の中で、僕の良心が腸を煮え繰り返している。

僕は決心した。プレゼントを^な失くしたという過ちを許してくれるかどうかはわからない。いや多分、許してはくれないだろう。僕には励ましの言葉を掛けてくれたとしても、心の中で僕を軽蔑するかもしれない。

だけど、正直にならないといけない。

お昼の時間に僕は彼の元へ行った。友達として最後の会話になるのかと、変な不安が僕を後戻りさせようとする。だけど打ち明けた。

「ごめん、無くしちゃったんだ。ペン立て。」

「やっぱり。」

「え、どういうこと？」





彼は鞆の中から、一つのペン立てを取り出して^{ほほえ}微笑んだ。

「この前、自習室に忘れてあったから。もしかしたらと思って。」

僕はこのペン立てに色々な事を教わった。お金の大切さ、お金が思いをプレゼントに変えてくれること。そして、お金では買うことのできない真の友情。このペン立てには、お金以上の価値がある。

